日本人と葬儀

―葬儀の歴史―

亡き人を厳かに送る葬送の儀礼―葬儀は、日本ではその多くが仏式で営まれていますが、もともと我が国には仏式でない固有の信仰（神道）に基づく葬儀がありました。

現存する最古の書である『古事記』には、

「天若日子の喪を弔う下照比売」
さぎやかわせみなどとアメノワカヒコの死を弔う妻のシタテルヒメ

喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鷺を掃持とし、翠鳥を御食人とし、雀を碓女とし、雉を哭女とし、如此行ひ定めて、日八日夜八夜を遊びき

とあり、アメノワカヒコの葬送についてのこの記述や、古墳の出土品からも、古代における葬儀のあり方をうかがい知ることができます。

しかし、大宝二年（七〇二）に行われた持統天皇の大喪（天皇の葬儀）から仏教色が強まり、つづく文武天皇・元明天皇・元正天皇の大喪もこれに倣って行われるようになりました。また中世以降は、仏教の興隆とともに公家や武士にまで仏葬が広まりました。

さらに、江戸時代に入って徳川幕府がキリスト教禁教令とともに寺請制度を実施して、一般庶民を檀家としたために、僧侶が独占的に葬儀を行うようになり、仏式による葬儀が一般にも定着することになったのです。

「火之迦具土神の誕生と伊邪那美神の死」
火の神をお生みの後、やけどをして亡くなってしまわれたイザナミノミコト

こうした中、我が国古来の葬儀のあり方を見直す動きが起こり、ようやく明治時代になって、神道式による葬儀を行うことが一般に認められるようになりました。

神葬祭とは、神道式で行う葬儀の名称で、日本固有の葬儀を土台に整えられた葬儀式です。厳かで儀式もわかりやすく、しかも質素なことから、今日では神葬祭が増える傾向にあります。

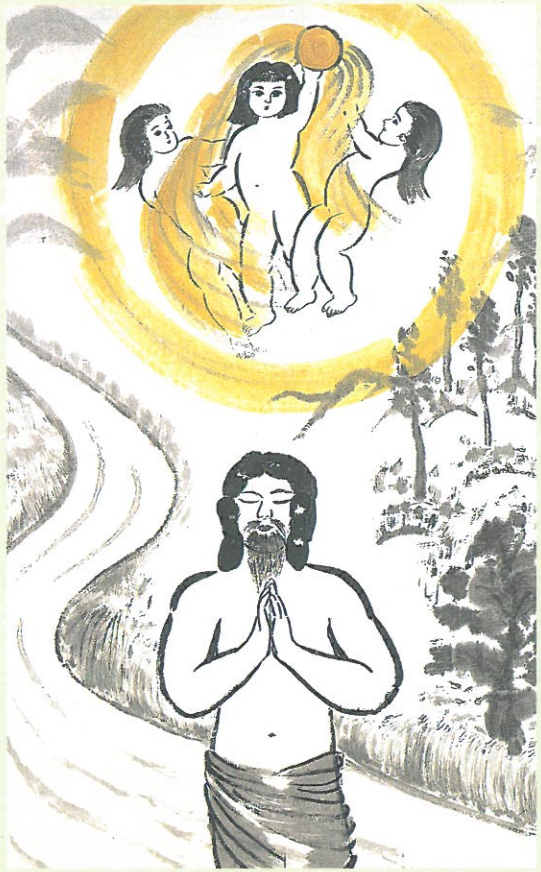
◆日本人と死

私たち日本人の伝統的な信仰は、人の犯した過ちは自分たちの慎みと神々の力によって祓い除かれるという、神々への厚い信頼のもとに培われてきました。お祭りや行事の中で、さまざまな清めの儀式が行われるのも、神々を恐れ畏み、神々のご加護をうけて、現実のこの世界で自分たちの力が少しでも社会の発展や繁栄に貢献できるようにという祈りがあるからです。

しかし、この世に生を享けた人は、死を免れることはできません。社会の発展のために活躍すべき生命力が衰えることは悲しいことで、永久に失われることは痛惜の極みと言わなければなりません。

そして日本人は、肉体の死という厳しい現実を前に、生命力が衰弱し、心の安定が乱れた状態を穢れととらえたのでしょう。とは言え、死をただ単に忌むべきものとして避けたのではありません。むしろ、死をきっかけにして生の意味を問い直し、祖先から享けた生を少しでも発展させて子孫に受け継いでゆくために、一人一人が自分の生を全うすることに大切なつとめを見出したのです。

こうしたことから、死とは生命の継承の節目でもあるのです。



「天照大御神・月読命・須佐之男命（三貴神）の誕生」
筑紫日向で禊されるイザナギノミコト

絵・出雲井晶筆「日本の神話絵画」より